

チャイルドエデュケア研究所

年報

23号

2025

桜花学園大学・名古屋短期大学



2025年度テーマ

「共生社会を担う子どもの育ちのために」

チャイルドエデュケア研究所機構図

目的

- 地域の関係機関・団体と連携し、教育・保育、子育て支援等の研究・事業の推進
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関する社会的要請に応える実践・研究・事業の推進
- 大学の教育研究の成果を地域社会に還元し、大学院生・学生等へ研究と学修の機会を提供
- 教育・保育に関する理論的・実践的な課題を、インクルーシブな観点をふまえ、グローバルかつ地域的な視点から研究し、教育・保育の社会的な充実発展に寄与

研修・事業部門

- 教育・保育に関わる理論的・実践的な研究と研究会、交流会、公開講座等の開催
- 教育・保育専門職の養成・研修・継続教育に関わる研究と事業
〈夏季保育セミナー〉
 - ・卒業生支援
〈冬の講演会〉
 - ・地域へのリカレント教育
- 目的達成のために必要な事業
〈子育て支援室「さくらんぼ」の運営〉
 - ・子育て交流会
 - ・支援室開放
 - ・さくらんぼ通信の発行
 - ・子育て講座・親子講座
 - ・学生ボランティアの参加

研究部門

- 研究所年報等の刊行物の発行
- 国内外の大学、研究機関、地方公共団体、関係団体との学術交流
- 外部機関・団体との共同研究及びそれらの機関・団体からの委託研究
〈教育・保育・子育てにかかわる研究や実践報告〉

相談部門

- 発達教育相談に関わる研究と事業及び教育訓練・研修等

★3つの部門で7つの事業を地域と連携しながら運営していきます。

目次

はじめに	【武藤直子】	2
§ 1 研究・実践報告		
(1) タイの幼稚園を訪ねて	【田端智美】	3
(2) オーストラリア保育留学で「多文化共生」を体験する	【ダーリンプル規子】	5
(3) 共生社会に生きる子ども達を育む保育者養成 ー多文化共生に触れるゼミ活動の実践ー	【川上知幸】	7
(4) インクルーシブ保育を支えるリソースルームの実践的意義 ー配慮を必要とする子どもへの支援を中心にー	【山下直樹】	9
§ 2 2025年度研修報告		
(1) 夏季保育セミナー（報告）	【ダーリンプル規子】	11
(2) 冬の講演会（報告）	【上村 晶】	15
§ 3 2025年度事業報告		
(1) 子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート	【上原隆司】	21
(2) 学生の学びの場としての子育て支援室「さくらんぼ」	【小柳雅子・武藤直子】	23

2026年度事業計画、編集後記

はじめに

2025年度は、前年に引き続き「共生社会を担う子どもの育ちのために」を全体テーマとして掲げ、①研修・事業部門 ②研究部門 ③相談部門の3部門で活動を行いました。子ども一人ひとりの育ちを支えるためには、教育・保育現場、家庭、地域、大学が協働していくことが不可欠であり、その実現に向けた取り組みを各部門で行いました。

研修・事業部門では、教育・保育現場で日々実践に携わる方々の学びを支えることを目的として、セミナー及び講演会を開催しました。7月に実施した「夏季保育セミナー」は「遊びを一緒に楽しもうー明日から使える保育・教育実践ー」をテーマに、卒後1～2年の卒業生である教育・保育者に参加してもらいました。現場に出て間もない時期に直面する戸惑いや課題を共有しながら、教員がそれぞれの専門分野を担当し、遊びを通じた学びの意味や具体的な実践のあり方について考える機会としました。本セミナーは、本学としての卒業後支援の一環としても位置づけられています。12月に開催した「冬の講演会」では、柏倉秀克先生に基調講演「障害児をめぐる制度改革とインクルーシブ教育・保育の課題」をご講演いただき、制度的な動向と現場の実践を往還しながら考える視点を学びました。さらに、上島遥先生、杉田なつ未先生には「医療的ケア児の教育・保育における連携」についてご報告いただき、医療・福祉・教育が連携することの意義や課題について理解を深めました。3名の先生方によるシンポジウムでは、多角的な視点から意見交換が行われ、参加者にとって実り多い学びの場となりました。各内容の詳細につきましては、本年報に記載しております報告をご覧ください。

研究部門では、研究成果や実践の過程で得られた知見を本年報に研究・実践報告として掲載しております。それぞれの報告が、現場での実践を振り返り、今後の保育

や教育の質の向上を考えるための一助となることを期待しています。

相談部門では、大学内の子育て支援室「さくらんぼ」において、年齢別交流会や開放日を実施しました。子どもや保育に関する専門性を持つ保育士が常にそばにすることで、日常生活の中でふと感じる疑問や不安、子育てに関する小さな悩みについても、気負うことなく安心して相談できる場となることを大切にしてきました。また、ゼミなどの授業での交流を通して学生にとっての学びの場ともなっていました。このたび、子育て支援事業につきましては、附属幼稚園における子育て支援と研究所としての事業の在り方を検討した結果、附属幼稚園が本来担うべき子育て支援の役割に立ち返ることとし、研究所が運営してきた子育て支援室「さくらんぼ」を閉室し、附属幼稚園における子育て支援事業に一元化することといたしました。これまで「さくらんぼ」を利用してくださった皆様、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。なお、豊明市との包括協定にもとづく豊明市子育て支援センター向けのこの交流は今後も継続し、地域との連携を大切にしながら、子育て支援に取り組んでまいります。

今後も引き続き、本研究所は、子どもや子どもを取り巻く社会に生きるすべての人々の幸せに寄与できるよう、研究員一同、教育・保育、研究、地域連携の充実に努めてまいります。2025年度のテーマに掲げた「共生社会」の実現に向けて、子どもたち一人ひとりが主体として感じ、考えたことを安心して表現できる教育・保育及び子育て環境を、皆様とともにつくっていききたいと考えています。そして、本年報が、本研究所の取り組みを共有するとともに、人と人、実践と研究、大学と地域をつなぐ一助となることを願っております。

チャイルドエデュケア研究所 所長
武藤 直子

タイの幼稚園を訪ねて

田端智美（桜花学園大学教育保育学部国際教養こども学科）
キーワード：タイ、仏教、幼稚園、主体性

タイでは仏教が国家や社会、文化の基盤として機能している。国王は仏教徒でなければならないとされている。国民については、憲法上宗教の自由は保障されているものの、94%が仏教を信仰している。タイでは、仏教の教えに従い、国の調和を図っていると言っても過言ではない。寺を訪問することは日常であり、また男子は成人すると数週間程度出家をする。従来は幼稚園でも仏教の教えを取り入れたところが多かったが、近年はインター校（英語教育を取り入れた幼稚園）も多くなってきており、その限りではない。このような事情の中、サイアム・サムトリ・スクールは、45年に渡り仏教の教えに基づき学校を運営している私立学校である。「遊び、学び、働き、社会に貢献する」を理念としている。また「遊び・学び」だけでなく、「働く」ということも意識して社会性を身につけるようにしている。子どもは主体性を持つように教育を為されている。今回は、幼稚部と共に小学部も訪問した。

最初に、校舎に入ると子どもたちは白い服を着ていた。これはタイ東北地方で作られたオーガニック麻の服である。そして園舎の周りを静かに歩いていた。その後静かに走ることもしていた。これは朝のお勤めで落ち着く時間を作っている。今日何をすべきか考え、整理する時間である。その後、仏の前に座り、手を合わせ、お祈りをした。半分くらいの子どもは没頭してお経をあげている。特に強制していないようである。姿勢を正して、その姿は美しかった（写真1）。その後、幼稚部（年少）の子どもは、運動遊びを行った。運動遊びに使用する器具（平均台など）を運び出す際も、静かに、友だちと助け合って行動に移る。皆で一緒に行うということを大切にしている。幼稚部の教育では、目、耳、鼻、舌、体、心を使って、遊び、学び、働き、社会に貢献することを実践している。これが教育の始まりになると言っている。運動遊びの際も、先生の指示に沿って動くのであるが、自分で考えて動く。友だちとぶつからないように動く、待つ等自分で考えて動く。また終わった



写真1 お祈りの時間

らどうするかを考える。先生は必要最小限しか話さず、子どもたちは静かに集中している。その後自分達で片付ける。特別支援（発達障害）の子どもが2人いて、加配の先生が2人いた。その子どもたちも落ち着いた雰囲気の中、活動に参加していた。

その後幼稚部（年長）のクラスを訪問した。このクラスでは、自転車について知っていることを発表していた。部位の名前（ハンドル・タイヤなど）や働きについて発表していた。私たちが幼稚部（年少）クラスを見学している間、幼稚部（年長）クラスの子どもは、実際に自転車に乗って遊んでいた様子である。その自転車についての仕組みを知ることを、これからプロジェクト保育としてやっていくそうである。実際に教室に自転車を持ち込み、仕組みを観察していた。その後「赤い自転車」を歌った。教室にはコーカイ表（日本で言うあいうえお表）とアルファベット表が貼ってあった。子どもは「赤い自転車」の歌を歌う際、歌詞について文字を読んで歌っていた。この学校では、文字を読むこと書くことについても強制をすることはない。しかし現在のタイの保育現場では4~5歳になると積極的に取り組んでいるようである（写真2）。



写真2 教室の様子

幼稚部では「働く」ということにも力を入れて取り組んでいる。この日は行っていなかったが、自分の靴を洗ったり、糸と針を使って服を作ったり、おままごと（本格的な器具を使っている）をしたりして実践的に体験をしている。また、環境や科学教育にも力を入れている。この時期の豊かな経験が、小学部の学びと繋がっている。この学校の教えでは、学ぶことが充実していると幸せの段階に達すると言う。

その後、小学部を見学した。ここでは、高学年の児童が、仏教の五戒についての劇を行っていた。実際に劇を行うことで、自らが仏教の教えを体験することをねらいとしている。彼らの

考える五戒とは ①生き物を殺してはならない ②人のものを盗まない ③他人のプライベートゾーンを触らない ④悪い言葉を使わない ⑤甘いもの（コーラなどの中毒性のあるもの）を飲まない の5点である。これは本来の五戒と通じている。例えば③について本来なら「不道德な浮気をしない」という戒律であるが、子どもならではの解釈をしている。また⑤についても、本来なら「酒類を飲んではならない」という戒律であるが、中毒性のある甘いものを飲まないという解釈をしている。このように小学生版の劇として演じている。ここでは、私たち外国人が来るということで、英語での説明も行ってくれた。タイでは小学校1年生2学期から英語が必須科目として実施されており、120分/週程度が実施されているそうである。5～6年生では、その英語学習のねらいの中に「身近なことについて情報発信できる」「関心あることを発表できる」とあるそうで、このように外国人に発信できることを楽しんでいる様子である（写真3）。

また、中学年の児童は「私たちの町作り」を行っていた。ここではいわゆる「お店さんごっこ」を実施していた。ここでは、「ネイルサロン（爪にシールを貼る）」「ヘアサロン（髪の毛を結う）」「スパサロン（クリームをつけてハンドマッサージ



写真3 劇の様子



写真4 町の様子

を行う)」「大工（工具を使って作る）」などを行っていたが、興味深かったのは「市役所」「警察」があったことである。「市役所」を担当している子どもたちは、自分達で町のルールを作って、看板を掲げている。子どもたちは遊びを通じて、職業観や社会性を身につけている（写真4）。



写真5 絵本

次に、低学年のクラスを見学した。ここでは、オリジナルの絵本作りをしていた。日本の漫画も人気なようで、それを真似てオリジナル漫画を作っている子どもがいた。また図鑑のように絵を並べて説明している絵本を作っている子どももいた。自分の興味ある分野を調べて、それを本にしてまとめることは、主体性を大切にしたい取り組みであると感じた（写真5）。

最後に、ノイ校長先生、オー先生がこの学校のシステムについてお話くださった。この学校の先生は教育書『サイアム・サムトリ タイの仏教教育システム (P.A.payutto 2009)』を学び、実践に導いているそうである。この本は、タイの教育のあり方を仏教の教えを用いて現代に再提案している教育書である。最近では英語翻訳版もある。この本の中で、著者 Payutto 僧侶は、IT 技術の発達に伴い、子どもが精神的な危機を迎えており自然との調和が失われていると提言している。ノイ先生もオー先生もそのことを危惧しており、教育が単なる知識伝授となってはいけないと言っていた。真の教育とは、人格形成や社会的貢献がいかにかにできるかということ、それができるか否かが幸福につながると言っていた。単なる科目教育にとどまらない 全人的教育こそが現代に必要であることも言っていた。学校と生活の連続性を教育の中心とすることで、真の幸福とは何かを学んでおり、それが社会性を育むことにつながっている。その事は、仏教教育の核心に触れることから為されている。タイの伝統的な仏教に根ざした教育は、この現代だからこそ再評価されるべきものであると感じた。



オーストラリア保育留学で「多文化共生」を体験する

ダーリンブル規子（桜花学園大学教育保育学部国際教養こども学科）

キーワード：多文化共生、オーストラリア保育留学

国際教養こども学科の学生は、4年間の課程の中で、2回保育の留学がある。1回は1年次2週間のニュージーランド保育研修で、もう1回は、2年次2月から3年次にかけての約11ヶ月、オーストラリアへの長期留学である。このオーストラリア長期留学における目標の1つは、オーストラリアの保育士の資格の1つ、Certificate III in Early Childhood Education and Careを取得することである。日本で学ぶ1・2年次では、日本とオーストラリアの文化や歴史を学び、英語をブラッシュアップする。ゼミ等ではグループやペアでの活動を多く取り入れ、留学中にお互い仲間でサポートし、この留学を乗り切れる協力・連携し合える力を高める。日本の保育士・幼稚園教諭養成課程の科目もできる限り理解し、身に着けていく。また2年次には、留学準備科目 Study Abroad Preparation を履修、VISA 申請をしたり、危機管理の講義を聞いたり、現地での学びについて予習したりする。オーストラリアに到着すると、英語を15週間学び、Upper-Intermediate というレベルを目指す。一般英語に加え、保育コースへ進むための準備授業、つまり「英語で保育を学ぶ」ための入門ともいえる授業も特別にある。

英語のレベル到達後は、約7ヶ月オーストラリアの保育一講義と実習一を学ぶ。講義は、必修15科目と選択2科目の計17科目で、各科目の課題に合格すれば、その科目の単位が認定される。また、同時に160時間以上の保育実習を行う必要があり、学生たちは週に1回実習に行っている。各年齢児の保育を体験すること、観察し記録を書くこと等、実習にも課題があり、合格基準に満たなければ、再提出を要求される。実習最後には、指導教員が実際に園での学生の様子を観察し、資格取得ができるかどうかを査定する。国際教養こども学科の学生たちは、この Certificate III の実習とは別に、もう1園実習を1週間に1回15週間行い、園によって特色が違う保育の在り方を学んでいる。

多文化共生の授業

さて、15科目の必修科目は互いに関連し合っているが、あえて「多文化共生」に焦点を当てたものとしては、2つの科目がある。1つは、「包括性と多様性の支援」(CHCECE030: Support inclusion and diversity) であり、もう1つがオーストラリアならではの科目「アボリジニおよび／またはトレス海峡諸島民の文化への理解の促進」(CHCECE054: Encourage understanding of Aboriginal and/or Torres Strait Islander people's culture) である。オーストラリア政府が様々な資格取得に関する情報を掲載しているウェブサイトがあり、

Certificate III のページには、科目の詳しい内容が載っている。それによると「包括性と多様性の支援」の科目は、

1. 自分自身の価値観と偏見についての内省・自己認識
2. 包括性と多様性への敬意
3. 子どもの包括性・多様性理解の支援

をねらいとしている。

では実際には、今年度留学した学生たちはどのような授業を体験しているのだろうか。国際教養こども学科では、渡航後、2週間ごとにレポート（英語および日本語）を提出することになっている。ある学生のレポートから、学びの姿を見てみたい。

授業では、自分の国の文化をクラスメイトに話して、どれだけ他の文化を理解できているかを確認しました。話し合いの中で、インド料理店と移民博物館を訪れてインドの文化を探求することにしました——クラスメイトの中にはインドを母国とする人もいます。（中略）これらの活動を通じて、インクルージョンと多様性が本当に何を意味するのかを学びました。同じ国の中でも、宗教や信念によって服装や食べ物が異なることを知り、地元の人々から直接文化の違いを理解できたことはわたしにとって素晴らしい機会になりました。

オーストラリアで保育を学ぼうとしている学生たちは、様々な国——例えば、日本、韓国、中国、タイ、ブラジル、コロンビア、ペルー、そして、このレポートにあるインドなど——からやってきている。自分が育った国だからこそ、自国文化について語る言葉には説得力がある。また、学生たちはクラス皆でインド料理店に行っているが、インド人の学生と共に、インドの文化に触れることのできる学びは、自分たちだけで行くのとは全く違うものであることは想像できる。生活であり日常であるその文化を当事者から学べる貴重な機会である。

もう1つの科目「アボリジニおよび／またはトレス海峡諸島民の文化への理解の促進」は、多文化共生の学びをさらに具体的に深めていっているように思う。この科目は、

1. 先住民および／または諸島民の文化に関する視点の特定
2. 先住民および／または諸島民の文化に関する地域的背景の調査・理解
3. 日常の実践へ先住民および／または諸島民の文化を組み込むためのアイディアの提案
4. 児童の理解と尊重の支援

を身に着けるための授業内容となっている。この科目についての学生たちの記録が非常に興味深い。授業では、映画から学んだり、学外に出て、美術館に行ったりしている。

授業では映画『裸足の1500マイル』で描かれた兄弟のドキュメンタリー映像も観ました。白人による親子の強制隔離、言語や文化の禁止、幼い子どもたちを寮に閉じ込め9歳の子がさらに幼い子を世話する。そんな人権を無視した現実が確かに存在していました。

最近の授業では、久しぶりに外での学習があり、アボリジニの美術館を訪れました。アボリジニとトレス海峡諸島民はオーストラリアの先住民で、独自の文化・言語・地域・慣習を持っています。今ではすべての子どもがアボリジニ文化を学び、尊重し、共に生きることの大切さを学びますが、昔は差別や虐待、強制労働など、奴隷のような扱いを受けていました。

ビクトリア州では、かつてKulin Nationsと呼ばれる5つのアボリジニ言語グループの人々が暮らしていました。現在の地図には境界線が記されていませんが、美術館ではどの部族がどの地域に住んでいたのかを地図で見ることができ、その数の多さにとても驚きました。

展示されていた工芸品はどれも自然と深く結びついていました。バスケット、ブーメラン、漁の網、すべて自然の素材を用い、繊細で美しい技術でした。しかし時代の変化や白人による文化・言語の制限によって、いま消えかけている文化でもあります。

また、実際に自分たちでそのアートを体験したりもしている。

学校ではアボリジナルとトレス海峡諸島の人々について勉強していて、その一環でドットペインティングに関する活動を行いました。葉っぱを使ってアボリジナルの旗とドットペインティングを描いて、彼らの自然とのつながりを表しています。

これらの体験的な学びから、学生たちは保育者としての姿勢や社会の一員としての在り方について考察している。

歴史や文化を守るための法律、私たちに何ができるのか、子どもたちにどう教え、どんな活動を通して尊重の気持ちを育てられるのか。オーストラリアのチャイルドケア業界で働く上で、「リスペクト」が何よりも大切だと学びました。

過去の歴史でアボリジニに対して起こった過ちを繰り返さないためにも、教育者や教育機関は、学びの場を提供する前に信頼できる情報源から正しい知識を得て背景を深く理解することが必要です。そのため、オーストラリア全体や各州には、先住民の文化や歴史を正しく知ることのできる仕組みや機関がしっかりと整備されており、その体制に私は大きな感銘を受けました。

さらに、アボリジニの文化は一つではなく、地域やグループによって言語や価値観も異なります。だからこそ、正確な情報を得るためにコミュニティの声に耳を傾け、自分自身も学び続けることが大切です。未来の子どもたちと先住民の方々との間の“ギャップ”を少しでも縮めるためには、まず教育者自身が尊重と理解を持つことが重要だと感じました。

そして、日常の中で、保育の現場で子ども達とかかわっていく時に大切なことに思いを巡らせている。

これまで「子どもたちにアボリジニのことを教えるには特別なアクティビティが必要」と思っていたのですが、授業を通して、日常の保育や学びの中で自然に文化を伝えることができることに気づきました。物語や絵本、音楽やアートを通して触れるだけでも、子どもたちの理解は深まります。また、彼らの持つ言語やシンボルには深い意味があり、それを正しく知ることが大切です。

違うからこそ、“尊重”することの重要性を体験している。

日本とオーストラリアの保育の違いも強く感じました。オーストラリアは多国籍な国なので、教育者はそれぞれの文化や違いを理解し、尊重することをとても大切にしています。実習を通して、まずお互いを尊重すること、そして違いを知るための知識を持つことの大切さを学びました。この考え方が私はとても好きです。人との間に問題を感じたとき、多くの場合は相手のことをよく知らないだけなのだ気づいたからです。

留学生という立場ではありますが、彼らがもともと暮らしていたこの土地で生活している以上、アボリジニの文化を知り、学び、尊重することはとても重要なことだと改めて感じました。

「多文化共生」を体験することの学びは、深い。

メルボルンに住んでいて感じることですが、オーストラリアにはたくさんの文化や民族が共に暮らしており、「多様性」について多角的に考える環境が整っているなど実感します。様々な面から物事を捉え、柔軟に問題を考えられる学びや生活環境があり、これは将来教育者として働く上でも大きな学びになっています。

Australian Government National Training Register Site
version 4.224.3.45 (<https://training.gov.au/training/details/CHC30121/qualdetails>)(2026-01-14)



共生社会に生きる子どもたちを育む保育者養成 多文化共生に触れるゼミ活動の実践

川上知幸（名古屋短期大学保育科）
キーワード：共生社会、多様性、排除

はじめに

近年、わが国では「地域共生社会」や「多文化共生社会」の実現を理念に掲げ、法制度が整えられつつある。テレビ、新聞、SNSなどのあらゆるメディアにおいても、共生社会に関する報道や配信がなされており、共生社会の理念や考え方は、かなりのスピードで社会に周知されているように見受けられる。

しかし、現実には社会は共生社会に向かうどころか、さらなる分断社会へと後退しているようにも感じられる。国籍や宗教の違いによる差別はなくなり、世界の各地で紛争や戦争も起こっており、多くの子どもたちが犠牲となっている。そして、自国第一主義が台頭し、排他的な政策に支持が集まりつつあるのは、わが国日本も例外ではない。

また、私たちの生活の身近なところでも分断や対立が顕在化している。SNS上では、自分と異なる価値観や考え方に対する誹謗中傷の問題が表出し、自殺者が後を絶たない。「多様性を認め合い支え合う社会」とは言い難い現実があることを私たちは認めざるを得ないであろう。

本稿では、こうした問題意識を背景として、共生社会を実現する「保育」や「保育者養成」のあり方と、児童養護施設と連携したゼミ活動の実践について報告する。

1. 多様な背景を持つ子どもたちが集まる児童養護施設

児童養護施設に入所する子どもの7割以上が虐待された経験を有している⁽¹⁾。児童虐待の問題は近年、新聞やテレビなどで報道されることが多く社会的認知が高まったため、児童養護施設の子どもたちに対するイメージも「被虐待」がクローズアップされがちである。しかし、子どもたちは虐待だけでなく、様々な障害や国籍の違いなど、実に多様な背景や特性を有している。何らかの障害のある子どもの割合は4割を超え⁽²⁾、日本以外の国籍を持つ子どもの割合も増加傾向にある⁽³⁾。つまり、児童養護施設は良くも悪くもインクルーシブな世界であり、多様な文化や特性を持つ子どもたちが一つ屋根の下で「共生」しているのである。また、施設職員は様々な専門性を発揮しながら多様な豊かな子どもたちの暮らしを必死に守っている。

2. 『中日青葉学園あおば館』でのフィールドワーク

中日青葉学園あおば館（以下、あおば館）は、筆者が以前に勤務していた児童養護施設である。児童心理治療施設や小中学

校の分校を敷地内に併設する施設であり、多様な背景を有しケアニーズの高い子どもたちが共同生活を送っている。保育科「保育基礎演習（1年ゼミ）」におけるゼミ活動の一環として、あおば館の協力を得ながら以下の通りフィールドワークを実施した。

【step 1】子どもたちとの交流・職員との座談会（2025年6月）

施設主催の全体行事に出向き、午前中は子どもたちと清掃活動、午後は遊びを中心とした交流イベントに参加した。学生らは清掃活動では子どもたちを手伝うだけでなく、なかなかかかどらない草抜きを子どもたちから助けてもらう場面もあった。交流イベントでは遊びを通して子どもたちとの距離を縮め、楽しい時間を共有したようであった。

また、イベント後には施設職員との座談会が設けられた。職員からは、子どもを支援する上での苦楽や子どもの成長を感じられる喜びなど、事例を元にリアルな実体験が語られた。

【step 2】ディスカッションとフィードバック（2025年7月）

施設での交流体験をゼミにて振り返った。学生らからは「施設にはもっと暗いイメージを持っていたが、子どもたちが明るく、良い意味で普通だった」との感想が複数挙げられた。「社会的養護」の授業では児童虐待の現状や子どもへの深刻な影響について学んでいたため、子どもたちの想像以上の明るさに驚いた学生も少なくなかったようである。

次に筆者から、交流した子どもたちが抱えている背景について、個人が特定されない配慮を行った上でフィードバックを行った。学生らが「普通」と表現した子どもたちの中には、障害や深刻なトラウマを抱え、生活の別の場面では時に攻撃性やうつ症状といったネガティブな様子が見られ、職員の支援を受けている者もいることを共有した。

さらに、学生らと子どもたちが楽しくワイワイと交流していた裏側で、その場に出てくることができなかった子どもたちも存在することを伝え、彼らの気持ちや感情を想像するよう促した。「共生」は時に誰かの我慢によって成立することや、無意識に誰かを「排除」することによって「共生」しているかのよう錯覚することがある。100%の共生社会の実現は現実には極めて困難であり、権利を侵害されながらも地道に生きる誰かの強さによって支えられていることを子どもたちの姿から学び取ってもらうことを期待したい。

【step 3】青葉まつりボランティア（2025年10月）

「青葉まつり」とは施設が主催する年に1度の大きなお祭りイベントである。祭りには施設の子どもたちと職員だけでなく、ケアリーバー（卒園生）、保護者、地域住民、近隣の留學



生ボランティアなど多様な属性を持つ人々が参加する。筆者のゼミは、このお祭りの運営ボランティアとして参加した。

本実践は単に行事の手伝いを行うことを目的としていない。そこには、発達特性や文化の異なる子どもたちが行事を通して関わり合い、支え合う姿がある。普段は関わることのない児童養護施設の子どもたちと児童心理治療施設の子どもたちとの交流がある。ゼミ生の活動ブースの隣では、日本語が苦手な多国籍の留学生たちと子どもたちが、身振り手振りでコミュニケーションを取り合う様子がある。そして、何事もうまく交流が図られる訳ではなく、時には子ども間でトラブルがあり、職員が対応に追われる様子も見られる。

また、重い障害やトラウマを抱えたケアリーバー（卒園生）たちが、彼らの子どもや家族を連れ、笑顔でたくましく生きる姿を見せてくれる。時には、未だ社会で排除され、生きづらさを抱える若者が祭りを訪れ、職員に悩みを話す。筆者がゼミ生のお世話をそっちのけで、終始入所児童やケアリーバーたちと話をしていたことの意味をゼミ生たちが感じ取ってくれることを期待する。

そして、これらすべての営みを祭りに参加する地域住民の方々にも見ていただくことは、子どもたちが地域で生きていく上で大きな意味がある。本実践は、学生らがボランティアを通して、多種多様な属性や背景を持つ人々が不器用ながらも共生しようと努力する姿に触れ、その光と影を感じ取ってもらうことを目的としている。

3. 学生自身の気づきを大切にすること。

学生が書いたフィールドワーク事後レポートの内容を二つ紹介する。「子どもに関わる仕事は子どもだけをみていればいいのではなく、その周りにいる人たちとのつながりを大切にすることが大事だと学びました」「相手の気持ちを読み取り、適切な声かけや対応ができる力をさらに伸ばしたいと感じました」という記述があった。

フィールドワークの意図は、明示しすぎないように配慮して



いる。学生一人ひとりが自らの体験から気づきを得ることが重要だと考えているからである。また、体験が学生個々の感受性や人生経験と結びつき、筆者の意図しない学びを学生自身の力によって得られる可能性もある。誘導的なフィードバックはそれを妨げかねない。1年前期「社会的養護Ⅰ」から始まり、後期「社会的養護Ⅱ」の演習、さらには施設実習という連続した学びが結びつき、前述した小さな気づきがさらなる学びへと醸成されていくことを期待するものである。

おわりに

地域共生、多文化共生への第一歩は、共生することの意義と共生することの心地よさを知ることだと考える。マジョリティがマイノリティを支えることによるのみ成立する社会は共生社会とは言えない。マイノリティと言われる人々の強さを感じ、共に生きることの喜びを感じる成功体験の積み重ねが、共生社会実現への原動力になると思われる。

保育者には、正に子どもたちにその体験機会を提供する使命があろう。その大前提として、保育者自身が共生社会のすばらしさを体験によって実感することや、他方で排除され続ける人々の存在と共生社会実現の課題を実感することの両面が必要と考える。このような観点から、共生社会の実現を後押しする保育者養成のあり方について、今後も模索を続けていきたい。

引用文献

- (1) こども家庭庁 (2024) 児童養護施設入所児童等調査の概要 (令和5年2月1日現在)
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/0f40dd16-8b14-4fe4-b3cd-6815fad26135/40120fc2/20250428policies-shakaiteki-yougo-research-Children_in_foster_care-14.pdf (閲覧日：2025年12月25日)
- (2) こども家庭庁 (2025) 社会的養育の推進に向けて
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/8aba23f3-abb8-4f95-8202-f0fd487f8e16/5d5e3ff4/20251218_policies_shakaiteki-yougo_150.pdf (閲覧日：2025年12月25日)
- (3) みずほ情報総研株式会社 (2021) 児童養護施設等における外国籍等の子ども・保護者への対応等に関する調査研究報告書
<https://www.mizuho-rt.co.jp/business/consulting/articles/2021-c0004/pdf/c0004-PDF07.pdf> (閲覧日：2025年12月25日)



インクルーシブ保育を支えるリソースルームの実践的意義 配慮を必要とする子どもへの支援を中心に

山下直樹（名古屋短期大学保育科）

キーワード：インクルーシブ保育、リソースルーム

1 研究の背景と目的

障害者基本法の理念に基づいて、保育の場においてもインクルーシブ保育の実現が求められている。

障害者の権利に関する条約を背景として、日本の保育現場においてもインクルーシブ教育の理念は広く共有されつつあり、障がいのある子どもの受け入れは進展している¹。一方で、通常の保育の枠組みの中だけでは対応が困難な個別の課題に対し、どのように専門的かつ柔軟な支援を提供するのかという点については、依然として課題が残されている。

このような課題に対する一つの方策として、筆者はこれまで「リソースルーム」の実践的研究を進めてきた²。リソースルームとは、米国におけるインクルーシブ教育の中核的な仕組みとして着目されており、通常の集団に在籍しながら、必要に応じて個別的な支援を受けることができる機能を有している。そしてリソースルームは、インクルージョンと個別支援を両立させる実践として位置づけられている³。

本稿は、インクルーシブ保育を具体的に支える仕組みとしてリソースルームに着目し、筆者が関わった3施設の事例を通じて、保育現場における実践的意義および課題について明らかにすることを目的とする。

2 本稿におけるリソースルームの定義

「特別支援教室構想」では、リソースルームは「必要な時間に特別な指導を受ける教室」とされ、通級指導教室の自校化等へと進化した⁴。一方で、保育現場における実践の積み重ねは少なく、未受診・未診断ではあるが、支援を要する子どもへの具体的な支援がかねてからの課題である。本稿ではリソースルームを、インクルーシブな環境における「より良い共生」を実現するための補完的機能として位置づけ、「子どもが通常の保育現場で他者と共に生活するための『個別の支援の場』」として定義する。

3 リソースルーム開設の理念と運営体制

3施設すべてに共通する特筆すべきことは、リソースルームが障がいのある子どものための場所ではなく、「すべての子どもに開かれた場所」として設計されている点である。利用にあたっては、保育者が対象児を一方的に選別するのではなく、保護者からの申請を原則としている。これは、特定の障がいなどによって子どもを分けるのではなく、保護者の願いや子どものニーズに基づいた支援を行うという、インクルーシブな理念の

具現化を目指して取り入れられた。

リソースルームを担当する職員が複数いる園もある（C園）が、主に1人で担当している園もある（A園、B園）。

リソースルームでの活動は、1枠30分程度の1対1の個別活動が中心である。プログラムは製作や微細運動など、子どもが「できた」という達成感を持ちやすい内容で構成される。また、「リソースルーム便り」の発行等を通じて、全保護者にその活動を周知し、園全体でこの機能を共有する仕組みが整えられている。

4 リソースルームの実践事例

4.1 A園の事例：環境への適応と成長

自閉スペクトラム症（ASD）の診断を受けたa児（5歳児）は、リソースルームに慣れておらず、自由遊びの時間にリソースルームへ向かうことに抵抗を示していた。そこで園は、リソースルームを全園児に知ってもらうため、他の園児（3～5歳児）が1～2人ずつリソースルームに入室するという「体験」を重ねた。この試みにより、リソースルームは「a君だけの特別な場」ではなく、園生活の延長線上にある「みんなの場」へと変容した。結果として、1対1の関わりの中で、a児はこれまで興味を示さなかった課題に取り組みようになり、「見て真似る」「考える」といった、小学校以降の学習基盤となる力を獲得した。

4.2 B園の事例：安心感の醸成と自己調整

ASDの診断を持ち、聴覚過敏による混乱が生じやすかったb児（5歳児）の事例では、リソースルームが「安心と自己調整の場」として機能した。ここでは、写真や絵カードを用いたスケジュールの確認が行われ、見通しを持つための練習が行われた。リソースルームでの1対1の関わりを通じて、b児は文字への興味を広げ、自分の名前を書く、トイレで排せつするといった生活スキルを身につけた。これは、個別の場で「安心」と「自信」を獲得したことが、クラスという園生活全体での安定を支える基盤となったことを示している。

4.3 C園の事例：情緒の安定と「往還」する支援

c児（4歳児）はまだ医療機関につながってはいなかったが、担任との面談を重ねる中で、保護者からリソースルーム利用の希望があった。感情のコントロールが難しく、集団の中でパニックになりやすいc児に対し、リソースルームは「安全に感情を発散し、受け止められる場所」として機能した。ここでの支援は、単なるスキルの習得ではなく、保育者との強固な信頼関係を築く「情緒的安全基地」としての役割であった。c児

は、1対1でのかかわりの中で感情を強く出すことがあったが、担当保育士に辛抱強く受け止められる経験を重ねることで、次第に自ら情緒を調整し、クラスの活動へと戻っていく力を身につけていった。リソースルームでの活動が自由遊びの時間内に設定されていることは、個別支援が日常の保育から切り離された場ではなく、日常生活との「往還」を可能にするための重要な工夫であった。

5 リソースルームの実践的意義と課題

リソースルームは「子どもの生活の本拠地はあくまでクラスにある」という前提を支えるための環境整備の一環である。C園の事例に見られるように、リソースルームは分離された場ではなく、インクルーシブ保育を構築するためのより現実的かつ柔軟な運用の姿といえる。

また、リソースルームは、保護者との信頼関係を深める重要な役割も担っている。リソースルームを利用する子どもの保護者と概ね月1回、行われる面談の時間は、保護者が抱える育児の困難さや不安を共有し、共感する貴重な機会である。また、乳幼児期における最大のライフイベントである「就学」に向けて、子どもの現状を把握し、小学校へのスムーズな引き継ぎを行う拠点としての役割も、リソースルームが果たすべき意義である。

リソースルーム運営における課題は、支援の質を保障するための「人」と「時間」の確保である。リソースルーム担当者がシフト制の中で固定の指導時間を捻出するためには、園全体の職員体制の工夫が必要となる。担当者が子どもとの1対1の時間を過ごすために、他の職員への心理的・実務的負担が増してしまうことがあってはならない。

また、園全体の「共通理解」と連携も重要な課題である。リソースルームが「特別な教室」として独立してしまうことで、園全体での連携が滞ることが危惧される。リソースルームでの「個別支援」をクラスで生かすことに繋げるためには、担当者や担任および園全体での連携が不可欠である。「連携のための時間的コスト」をいかに園の運営システムに組み込むかが、リソースルームでの実践を生かす鍵となる。

6 総合考察——インクルーシブ保育の質的転換に向けて

いくつかの課題はあるものの、リソースルームの実践は、これまでの「障がい児保育」を「すべての子どものためのインクルーシブ保育」へと質的に転換させる可能性がある。

保育現場では、医療機関等の専門機関につながっておらず、

支援の必要性が認められるにもかかわらず、適切な支援に結びついていない子どもが一定数存在する。その要因の一つとして、乳幼児期は発達の可塑性が高く、今後の成長への期待が大きいことから、保護者が専門機関受診に対して心理的抵抗感やためらいを抱きやすい点が挙げられる。リソースルームは、園内において個別的な支援を行う体制を有しているため、受診の必要がなく、保護者の心理的負担を軽減する役割を果たしている。また、リソースルーム担当者との継続的な面談を通して、子どもの発達に対する理解が深化し、専門機関受診への動機づけが形成される点において、重要な意義がある。

また、リソースルームが園内に存在することで、個別支援とクラスでの生活をスムーズに「往還」することができる。C園における実践に見られるように、子どもにとって「情緒的安全基地」としてリソースルームは機能する。個別的な支援空間で十分に自己を発散し、認められた経験を持つ子どもは、クラスにおける生活の中でも安定した行動を取りやすくなる。この「個別的支援とみんなとの生活」という「往還」は、インクルーシブ保育のための具体的かつ現実的な支援の形態であると思われる。

最後に、今後の展望としては、リソースルームが地域の専門機関との連携の窓口となることが期待される。外部専門家による巡回時に、リソースルームでの個別支援活動を観察し、その場で保育者に具体的な助言を行うことで、園全体の専門性が質的に向上する。また、保護者にとっても、園内に専門的な支援の場があることは、就学への不安を軽減し、家庭と園が一体となって子どもの育ちを支える強力な基盤となる。リソースルームを核とした「顔の見える連携」が広がることで、インクルーシブ保育はより強固なものへと進化していくだろう。

引用・参考文献

- 1 文部科学省「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築について（報告）」2012
- 2 山下直樹、大原隆子、加藤晴美「保育園における特別な支援を必要とする子どもへの特別支援保育(1)——リソースルーム開設から2年間の試み」第74回大会発表原稿 2020
- 3 都築繁幸、林真知子「米国の障害者教育政策に関する一考察(2) インクルーシブ教育システムをめぐる問題を中心に」『障害者教育・福祉学研究』NO.9 2013
- 4 国立特別支援教育総合研究所「『特別支援教室構想』に関する研究」研究成果報告書 2009

夏季保育セミナー（報告）

遊びを一緒に楽しもう 明日から使える保育・教育実践

報告者：桜花学園大学国際教養こども学科 グーリンプル親子

名古屋短期大学・桜花学園大学保育学部を卒業した若手保育者を対象とした夏季保育セミナーを、本年度は7月6日（日）13:30～15:00に開催しました。

本年度の研究所のテーマは、昨年度と同様「共生社会を担う子どもの育ちのために」です。さらに夏季保育セミナーのテーマも、昨年度の卒業生たちの姿から、母校でのホッと一息を感じながら、楽しみながら自分の引き出しを1つでも増やしてもらいたい、それが日々の保育を子どもと共に楽しむことにつながればさらに嬉しい、という思いから、昨年度のテーマでもあった「遊びを一緒に楽しもう—明日から使える保育実践—」といたしました。ブースの数は7つ。前半・後半と希望の2つのブースを皆が楽しめるようにと考えました。今年度のブースのリーダーは、名古屋短期大学・桜花学園大学それぞれの教員。卒業生が大学時代に戻ったような気分になってもらおうとの思いでの企画でしたが、卒業生にとって、どのような体験となったでしょうか。

会場は、今年度も、8号館1階のラーニングcommonsと3階のリズム室。ラーニングcommonsでは、おしゃれで暖かな雰囲気の中で、楽しくおしゃべりも弾むかなと、テーブルの配置やコーナーの場所も工夫しました。3階のリズム室では、思い切り身体を動かして楽しんでもらおうと、「身体であそぼう」のみの活動といたしました。

当日は、どのコーナーも、温かい和やかな雰囲気の中、ゆったりと時間が流れ、でもあっという間に1時間半が過ぎていたのです。



①触れ合って遊ぼう

触れ合って遊ぼうのコーナーでは、未満児さんを念頭に、お人形を使ったり、他の参加者とペアになったりして、まずはわらべうたを楽しみました。わらべうたは、道具はなくても簡単にできるものから、布やお手玉などちょっとした小道具があることで楽しめるものなど、いろいろです。うたも、とても短くリズムも小気味よく、すぐに覚えてしまうものが多いのが特徴です。そのうえ、子どもとのやりとり—いっしょが楽しい—を体験するのに、理想的な遊びです。お人形さん相手に楽しそうに、でも真剣にやっていた卒業生、ペアの人とちょっとはにか

みながらも、口ずさみながらわらべうたを覚えていた人、みんな、笑顔が絶えないのが印象的でした。

わらべうたの後には、未満児さん向けの絵本がいっぱい。自分が相手に読みたい絵本を選んだり、自分の保育にも生かせそうだと園の子どもを思い浮かべながら絵本を読んだりする姿が。こちらの活動も、絵本を読み聞かせる方も、読んでもらっている方も、穏やかな表情で、時には声を出して笑いながら、絵本に魅入っている姿が印象的でした。

終わった後にも、わらべうたを口ずさみながら次のコーナーへ移動している人、「絵本の写真を撮ってもいいですか?」と、明日からの保育を嬉しそうにお話してくださる人の姿に、私も心がほわっと暖かくなり、こんな保育者たちにかかわってもらえる子どもたちは幸せだなあ、と思えた時間でした。久しぶりに会えた元学生たちも多く、その成長も実感したうれしいセミナーでした。



②サブカルで遊ぼう

サブカルで遊ぼうのコーナーは「子どもと活動する際のヒント」ではなく「保育者となった卒業生自身が楽しむためのヒント」を体験していただきました。サブカル（サブカルチャー）には様々なものがありますが、今回取り組んで頂いたのは「お名前ロゴのデザイン」です。学生時代、現場での実習に向けて名札を作ったことを覚えていますか？実習先の子どもたちになるべく早く名前を覚えてもらえるように、そして親しみを感じてもらえるようにデザインや素材、色などにも創意工夫をこらした方も多いのではないのでしょうか。

「お名前ロゴ」はその延長とも言えます。保育者の創意と感性に満ちた自分だけのお名前ロゴ。今は色々なツールを使えばロゴを作ることも容易ですが、やはり自分の手と頭を連動させて作ったロゴは独特の味があります。皆さんは自分の名前の文字

をデザインしてみてくださいと言われてたら、どのような文字を描かれますか？ ひらがな？ 漢字？ アルファベット？ 大きさは？ 色は？ 太さは？ 形は？——このコーナーに参加して下さった方も最初は色々と試行錯誤。ポストカードサイズの紙に文字をデザインし、文字本体や周囲を様々にデコレーション。普段、保育現場では子ども達が一生懸命に取り組んでいるであろう活動に、この日は保育者となった卒業生の皆さんが一生懸命に取り組んでくださいました。出来上がったロゴは、それぞれのお人柄を表しているようでした。時にポップで、時に柔らかく、時に大胆で、拝見していてとてもワクワクする文字ばかり。

実は、この活動には文字に対する苦手意識や固定観念を変えて頂けたら嬉しいという意図もありました。いわゆる「綺麗な文字」も素敵ですが、文字はもっと自由で良いのです。絵を描くように文字を書く。保育者のさりげないチャームアイテムにも出来る「お名前ロゴ」、自分の名前を覚えてたの子ども達とも一緒に楽しめますので、是非現場でもどうぞ♪



③作って遊ぼう

作って遊ぼうのコーナーは、1回目10名、2回目13名の参加がありました。今年度作って遊んだのは、「簡単くるくる万華鏡」。身近な廃材であるトイレトペーパーの芯と、100円ショップでも手に入るミラーシート、そのほかの材料も園にあるであろうものばかり。トイレトペーパーの芯とミラーシートは半年前の行事で使用し、余っていたものを使いました。参加していただいた皆様には、ずっと捨てられずに困っていたものの消費を手伝っていただきました。そのあたりの事情も説明しましたが、「余り物」を使うことに対して嫌な顔をする参加者はいませんでした。廃材は各家庭から集めることが多いですが、園内で様々な場面で発生する可能性のある「余り物」の利用についても、今後考える場面があるかもしれません。

今回作ったのは「手描き」の万華鏡。作り方が書かれた紙と必要な道具をテーブルの上に用意すると、ほかの参加者の分の材料を切り分けてくれている様子が見られ、現場でもてきぱきと仕事をしている卒業生たちの姿が想像できました。「線は太い方がきれいに見える」とか、「少し紙を筒から離した方が、光が入って綺麗に見える」など、自分たちで教材の研究をしながら短い時間の中で2つ3つと楽しく作っていました。手を動かしながら、久しぶりに再会した学生時代の友人同士で、「うちのクラスの子が一番かわいい」と自慢し合ったり、仕事の大変さを語り合ったりする様子も見られ、良い気分転換の時間になっていたようです。

作品が完成すると、「見せて」「これも見てみて」と互いの万華鏡を見せ合い、紙に描くだけとは思えない美しさを楽しんでもらえている様子でした。終了間際には、「100円ショップで買えるんですか」「余ったミラーシートをもらって帰ってもいいですか」「明日、さっそく子どもたちとやってみます」といった嬉しい声も聞かれました。子どもたちと一緒に楽しんでもらえていたら幸いです。ご参加いただき、ありがとうございました。



④身体で遊ぼう

卒業して2年目の保育士2名、幼稚園教諭1名と卒業して1年目の保育士2名、保育教諭1名の合計6名が参加してくれました。最初に自己紹介をし、その後、キャッチング・ザ・スティック、新聞紙ランニング、新聞島（新聞紙じゃんけん）をしました。

キャッチング・ザ・スティックは日本レクリエーション協会が考案したチャレンジ・ザ・ゲームの一つで10人が横一列に並び、向かって右から8人がスティック（2本）を持ち、左側の2人が待機。はじめ「セーノ、トン、トン、パツ」の掛け

夏季保育セミナー

声に合わせて、スティックを床に2回突き、「パッ」で右隣の人の2本のスティックを移動してキャッチ。全員が成功したら1カウントで、リズムに合わせて何回続けられるかを楽しみます。今回は6人で実施しました。技術や体力、勝敗を競うのではなく、グループでの交流を楽しみながら記録に挑戦する遊びなので、幼児や小学生も楽しめます。スティックは専用のものでも、新聞紙をくるくる巻いてテープで止めれば簡単にできます。

新聞紙ランニングは、新聞紙を広げて胸に当てて、落ちないように走ります。全身運動なので走力を養うことができる遊びです。新聞紙を折って忍者の被り物を作って、忍者になったつもりで走るとより楽しむことができます。

新聞島（新聞紙じゃんけん）は、新聞紙を島に見立て、少しずつ折り曲げて小さくなっていく新聞紙の上でバランスを取るゲームです。最終的にはつま先立ちや片足立ちをすることになるので、バランス感覚を養うことができる遊びです。今回は二人一組での対戦形式で行いましたが、保育者対子どもたちなど集団で遊ぶこともできます。

今回は新聞紙を使って手軽にできる運動遊びを実践しました。簡単に用意できる新聞紙は、乳児から幼児・学童まで幅広い年齢で楽しめる素材です。また事前の準備なしで気軽に取り入れられるので、スキマ時間のちょっとした遊びとして楽しめると思います。



⑤小学校・特別支援学校おしゃべりタイム

小学校、特別支援学校に勤務する4名が集まり、日常の苦労や困っていること、また児童・生徒に対する思いなどを語り合う時間となりました。

やはり話題の多くは、現場で働くことの厳しさでした。「なかなか思ったようにはいかない」「子どもへの対応が難しい」など、学生のころに描いていた思いとのギャップに戸惑いを感じ

ているようでした。しかしそんな中でも「Aさんが、こんな姿を見せてくれた」「Bさんがこんなことをできるようになった」という児童・生徒の変化を喜んでいる話も聞かせてくれました。忙しく厳しい毎日でも、教員の仕事にやりがいを感じていることは、とても嬉しいことです。

またそれぞれの取り組みを紹介し、それらを自分の学級に生かすなら、どのようにできるのかを考え合ったり、新しい教材の情報交換をし合ったりしている姿に、それぞれが教員としての自覚を十分にもっていると感じました。

最後に「みんなと話せてよかった」という声があがりました。このような機会に、学生時代の仲間と語り合うことは、明日へのエネルギーになるようです。明日からの活躍に期待しながら会を終えました。



⑥保育おしゃべりタイム

「保育おしゃべりタイム」では、初任保育者が現役保育士として活躍する先輩卒業生に質問を行い、保育実践に関する情報交換や意見交流を行いました。「3歳児クラスで給食後に座ってられない子が多い」という初任保育者からの悩みに、先輩保育者から「3歳児が給食後に座ってられないのは自然な発達段階によるものであり、適切な働きかけができていないわけではないよ」との助言があり、そこから、子どもの発達理解や保育者の対応について意見交換が行われました。「夏の遊び」に関する話題では、猛暑によりプール遊びが制限される園が多いことから、泡遊びや感触遊びなど、各園での工夫を共有したり、夏の遊びのバリエーションや、雨天時に室内で体を動かす遊びのアイデアについても情報交換を行ったりしました。また、「複数担任でのクラス運営」については「初任保育者がリーダーを務める際に保育がうまく回らない」という課題が共有され、子どもの気持ちを引き出す方法や、先輩保育者との関係づくりに関して話し合いました。さらに、園内で相談できる

人がいない、相談しても冷たく対応されるといった職場環境に関することや、県外の大学から地元に戻って就職したものの、身近に相談できる友人がいないという孤立感に関する悩みなど実践的課題や心理的負担についての話をするなかで、日頃抱えているしんどさや不安感を少し下ろせたようでした。その表情から、聞いたり、話したり、「おしゃべり」は元気の源であることを感じました。



今回のセミナーでは、セミナー担当の教員だけでなく、名古屋短期大学や桜花学園大学からも先生たちが多く参加されました。久しぶりに会えた先生とじっくり話す姿もあちこちで見られ、やはり、学生時代に見守ってくださっていた先生方との会話は、格別なものがあるのだらうと思いました。また、卒業してからもよく会う友達に加え、遠方に行ってしまいなかなか会えなかった友達にも会える機会となった参加者たちもちらほら。話が尽きない雰囲気、なんだかこちらまでうれしくなっていました。

帰り際に、参加者の方たちから、「参加してよかった」「自分の引き出しの中身が増えました」「YouTubeでいろいろ見てみます」等々、素敵な笑顔で声をかけられました。彼らの、「明日からも頑張ろう！」に、少しはお役に立てたかな、とホッとしました。

チャイルドエデュケア研究所が主催するこの夏季セミナーは、卒業生が自分らしくいることができ、かつ、保育の楽しさを新たに感じる機会になれば……と願っています。これからも、卒業生たちにとって、大学がいつでも戻ってこられる“我が家”のような場所になりますように……。

各ブースの担当教員 ● ①ダーリンプル規子（桜大国際教養こども学科） ②小柳雅子（名短保育科）
 ● ③上原隆司（名短保育科） ④寺田泰人（桜大教育保育学科）
 ● ⑤森川拓也（桜大教育保育学科） ⑥武藤直子（桜大教育保育学科）

参加者 アンケート (抜粋)

- 様々なブースがあって、自分が参加したブースももっと知りたいと思うことがあったので、機会があればまた参加したいと思いました。
- 同じ悩みを抱えている方もいて、悩みを共有することができて良かった。ありがとうございました。
- 教材を作ったり、身体を動かしたりして楽しかったです。
- 保育のことを学びつつ、久しぶりに会うお友達や先生方とお話することができたので、とても楽しかった。ありがとうございました。
- 保育おしゃべりタイムのあった先生方がとても素敵で、たくさんお話が聞けて勉強になりました。
- これからも先輩の話や相談できる機会が欲しいです。
- とてもためになるお話や技術を知る事が出来ました。また、明日からの保育に生かしていきたいと思います！
- 自由にやれるのが楽しかったです！サブカルは気分転換になって楽しかったです。
- とても楽しかったです。実際に子どもたちとも作ってみます！
- すぐに明日にでも使えそうなものばかりでとても楽しく参加できました。
- 楽しかったです。色々な人と、色々な園の話が聞けました！！
- 先生達に会えて楽しかったです！

冬の講演会(報告)

基調講演

「障害児をめぐる制度改革とインクルーシブ教育・保育の課題」

シンポジウム

「医療的ケア児の教育・保育における連携」

桜花学園大学副学長・教授 柏倉秀克氏

愛知学泉大学准教授 上島 遥氏

名古屋市港保育園保健師 杉田なつ未氏

2025年度冬の講演会では、「共生社会を担う子どもの育ちのために」というテーマを踏まえた基調講演とシンポジウムを実施した。



第一部は、桜花学園大学副学長・教授の柏倉秀克氏による「障害児をめぐる制度改革とインクルーシブ保育・教育の課題」と題した基調講演を行った。また、第二部は、「医療的ケア児の教育・保育における連携」というテーマで、愛知学泉大学准教授の上島遥氏と、名古屋市港保育園保健師の杉田なつ未氏から話題提供いただき、その後柏倉氏を交えた討論形式のシンポジウムを行った。

講演会当日は、214名の保育関係者・学生が参加した。以下、講演・シンポジウムの概要を紹介する。

1. 基調講演 「障害児をめぐる制度改革と インクルーシブ保育・教育の課題」

障害がある人々と障害がない人々を包接する多様性を尊重した「共に生きる社会」が、インクルーシブ社会である。障害がある人々へ寄り添った関わりが展開されるためには、家族に障害者がいるなど個人の生活経験に密着した障害への深い理解を伴う「事情通」を増やしていくことが重要である。価値観が醸成される幼い時期から、障害の有無を超えて共に遊び学ぶ経験をすることが社会を変えていくことにつながる。

教育・保育場面における排除と包接に目を向けると、サマランカ宣言（1994）や国連障害者権利条約などの国際的な動きを踏まえ、SEN（Special Educational Needs：特別な教育的支援ニーズ）のある子どもたちを包接するインクルージョンの時代へと社会は変化している。しかし、日本は統合保育・特

報告者：桜花学園大学教育保育学部教育保育学科 上村 晶

別支援教育に特化している現状もあり、インクルージョンの具体的実践の推進が期待される。例えば、このSENの子どもたちは、日本では「1：障害のある子」「2：グレーゾーン・ボーダーラインの子」などに焦点化されてきていたが、諸外国では「3：情緒面に困難を抱える子」「4：家庭環境が厳しい状況にある子」「5：外国籍や外国にルーツのある子」に分類される子どもたちが中心的課題となっている。日本も今後は、3・4・5あたりのSENの子どもたちへの対応を拡充することがますます求められると言えよう。

ダイバーシティとインクルージョンの概念に着目すると、ダイバーシティの定義で冒頭にcoming of「性」である。性的違和の子どもたちは、最近の調査では10%くらいの頻度でいるため、このような子どもたちの存在を保育・幼児教育の専門家が真剣に考えて保育を展開することが重要である。また、インクルーシブ教育・保育を担う専門職として、保育者には単なる障害理解に留まらず、子どもの多様性への対応や差別や偏見を生まないクラス運営が求められると同時に、カウンセリングマインドや公平性・自己覚知なども求められる。つまり、保育者として自分の担当する子どもたち全般に対する専門家としての意識や、多様に富んだ子どもたちの様々な理解を深める意識を維持することが重要であると言えよう。



障害児やその家族を取り巻く状況に目を向けると、今日、子どもたちは深刻で厳しい状況に置かれている。特に障害のある子どもの支援に関しては、就園・就学・就労など「移行期における支援の切れ目」が注目されており、支援の一貫性が求められている。その他、貧困家庭における教育・体験格差、必要な支援につながらないという問題もあり、医療的ケアの支援環境整備が急務である。

この点に関し、国が高齢者・障害者・子どもへの支援を縦割り行政で行うのではなく、「生活困窮」という共通事項に基づいて一体的な支援を行う「重層的支援体制整備事業」が注目されている。例えば、8050問題（高齢の親が引きこもりの子を支える）、介護育児ダブルケア問題（子育てと親の介護が同時のタイミングで訪れる負担の深刻化）、障害のある子の親の要介護問題（要介護状態になった親が子をケアする、親亡き後の不安）などが挙げられる。このような諸問題を解決するためにも、複合的な課題にアプローチできる重層的支援が急務であると言える。

諸外国に目を向けると、英国では障害者差別禁止法（1995）に基づき、多くの障害児が通常の学校で教育を受けることになった。しかし、いじめ・仲間外れや、障害児を教材化する教師などの諸課題が浮上したため、障害児を取り巻く周囲への理解啓発や、教育関係者の専門性向上のための研修、支援学校教員による地域の学校への巡回相談などに取り組んでいる。今後日本でも、特別な教育ニーズ・コーディネーター（SESCO）が注視されていくことが期待されると同時に、SESCOの養成プログラムの実践・展開も必要だと考えられる。

最後に、日本におけるインクルーシブ保育・教育の課題として、小規模クラスや保育者の配置状況などといったクラスの構造的環境の改善や、教育者・保育者が様々な専門職・専門機関と連携する多職種連携・多機関連携が挙げられる。愛知県でも途切れることのない継続的な支援がモデル化されていることが紹介された。

2. シンポジウム 「医療的ケア児の教育・保育における連携」

上記の基調講演を踏まえ、上島氏より「医療的ケア児の教育・保育における連携」と題して、話題提供いただいた。

医療的ケア児とは、新生児集中治療室（NICU）等を退院後も、引き続き人工呼吸器や胃ろう等を使用し、たんの吸引や経



管栄養等の医療的ケアが日常的に必要な児童のことであり、在宅の医療的ケア児は全国に約2万人いるとされている。2008年と比べると、医療的ケア児数は約2倍に、人工呼吸器児数は約12倍に増加しており、愛知県内にも2020年時点で未就学児が35.7%、就学児（小／中）が27.4%いるというデータが示されている。名古屋市の調査では、78.6%の子どもが出生～退院直後から医療的ケアが必要とされ、在宅移行時の年齢も3か月未満が34.8%と最も高い。加えて、在宅移行時の困り感・不安としては、急変時の対応、介護の代わりがない、家族による医療的ケアの実施などに50%以上の高い数値が示されている。

必要な医療的ケアとしては、経管栄養、吸引、気管内挿管・気管切開、人工呼吸器管理などが挙げられる。医療的ケア児は自分で移動することが難しいという回答が6割近くある一方で、歩くこと・走ることができる子は17～18%ほどおり、身体障害者手帳の非保持者が11%ほどいる現状がある。また、医療的ケア児と重症心身障害児とは異なり、知的発達に遅れない子や、肢体不自由であるとは限らない子もいる。このような子どもは、一般的に「動く医療的ケア児」と言われている。

また、家族側に目を向けると、ケアを依頼できる人がいない、5分以上目を離せないというデータもあり、家族は慢性的な寝不足・日々の緊張・将来への継続的不安などを抱えやすく、自らの体調不良時に医療機関を受診することも難しい。また、医療的ケアに対応可能な事業所が少ないなど、必要な支援につながらないケースも多くある。家族の負担を軽減するためには、医療・福祉・教育・保育の連携は不可欠である。

医療的ケアとは、自宅で子どもを見る時に必要な生活援助と医師や看護師に認められている医療行為の狭間の中で、医療的

冬の講演会

生活援助行為と定義づけられている。教員による医療的ケアを行う場合、①教育的意義（学校で授業が受けられる）、②医療的意義（教員が医学的知識を身につけている）、③福祉的な意義（保護者に時間的な余裕が生まれる）などがある。

制度の変遷を概観すると、2012年には介護職員等による喀痰吸引などの実施が可能になり、2016年には障害者総合支援法及び児童福祉法の一部改正により医療的ケア児が福祉の対象として明確に位置づいている。また、医療行為より見守りが必要な子どもに対して従来評価できる指標がなかったことから、2018年には医療的ケア児スコアが新設された。2021年には医療的ケア児支援法が施行され、教育・福祉・医療の連携を制度的に支える枠組みの整備は整ったが、看護師等の確保の難しさから実際の園での受入れが難しく、保護者が自宅で保育する現状も存している。

こども家庭庁（2024）によると、保育現場の課題として、看護師の確保（75.7%）、施設設備の非対応（33.4%）、事故発生時のリスク対応への懸念（41.5%）などが挙げられている。園で医療的ケア児を受け入れる際には、保育課・担当看護師・訪問看護ステーションが同じチームになって連携する、周囲が理解しやすいような紙芝居を作成し、子どもたちが育ちやすい環境を整えてインクルーシブ保育を推進するなどの工夫が見受けられる。

現在、地域の幼小中高等の学校には約2500人、特別支援学校では約8700人の医療的ケア児がいることが報告されており（文科省、2025）、保幼小には一型糖尿病の子どもが多い。課題として、看護師の確保や定着の難しさが挙げられているため、研修やサポート体制の構築が求められる。また、児童生徒の理解・教職員全体の理解を深め、互いの専門性を把握した上で目的を共有するなど、子どもの学びを支える医療的ケアを目指して連携することも重要である。加えて、在宅で行うケアスケジュールを学校という教育機関で行う場合は、授業中に抜けていく子もいるため、周囲の理解が深まる働きかけなども必要である。

最後に、愛知県には基幹支援センターと地域支援センターが計7か所あり、医療的ケア児コーディネーターは、53市町村に455人（2025年4月現在）いる現状がある。このような医療的ケア児の多様性と個性を尊重しながら、子どもや家族にとって持続可能な支援体制を構築し、職種間の協働に向けた専門性の相互理解が必要であると言える。

続いて、「医療的ケア児の保育における連携」と題して、杉



田氏より保健師の立場から、名古屋市内の保育所で日々の実践・ケアに携わっている内実について話題提供いただいた。

名古屋市公立保育園では、2019年度からモデル事業として約7名の医療的ケア児を受け入れ始め、国の医療的ケア児の保育所等受入れガイドラインが策定された2022年度から本格実施をしている。このガイドラインには、保育所等での医療的ケア児の円滑な受け入れ・支援が図られるための基本的な留意事項が示されており、医療的ケア児を含めた全ての子どもたちが安心・安全な生活を送り、相互理解を育みながら共に成長していくことを目的として作成されている。このガイドラインに則り、杉田氏が携わった実践として、2名の児童の事例が紹介された。

1歳児クラスへ入園し5年間在園したAさんは、自己座位保持が難しい重症心身障害児であり、園では経管栄養を毎日実施していた。入園時点で、自分の意思で手指を動かすこと、肘を伸展することが難しく、受け入れ当初は、看護師・保健師・保育士も対応に悩みつつ、「Aさんを知ることから始める」よう努めた。同じクラスの子どもたちの傍で過ごす中で園に慣れてもらう、担任保育士にも落ち着いている頃に抱っこしてもらうなどを通して、ゆっくり関わりながら関係を構築していき、少しずつ周囲にも視線を向けたり笑顔を見せたりするようになった。また、担任にも情報を共有して、Aさんも楽しめる遊びを大人が仲介して遊べるようにしたり、理学療法士に園の様子を見てもらいながら、Aさんが楽しめる活動を探したりした。保護者からは「保育園の話をするとうるさく」という嬉しい言葉が聞かれ、他児もAさんをクラスの一員として受け入れる様子が見られた。

その後、3歳以上児クラスになると、クラスの活動にできる限り参加することを目標とし、担任と関わる時間を増やし、他児と繋がり一緒に楽しめるよう努めた。低い位置で本を読むと、他児も傍に来て寝転んで一緒に絵本を読むなど、同じ地平から友達もAさんへ関わる姿も写真で紹介された。また、また、ユニバーサルデザインの色々な教具を用いて友達と共に活動を楽しめるよう配慮した。Aさんも色や遊びを選ぶなどの自己決定ができるようになると同時に、友達もAさんの応答や瞬きを見て意思を確認できるようになり、瞬きの様子や首の動きや傾きを見て意思を汲み取ろうとするなど、子どもたちの直接的なやり取りが増えた。5歳児クラスでは、行事（運動会）への参加に際し、理学療法士から助言を受けながら工夫と模索を重ねた。夏祭りの「太鼓をたたく」ために、介助者がバチを一緒に持って動かす・太鼓を縦置きにして手を動かしやすいなどの工夫をした。また、個人競技はAさんが少しだけ頑張っていることを採り入れたり、全体競技は、腕を上へ伸ばす動きやカラビナや紐を用いながらパラバルーンとバギーと一緒に移動したり膨らませたりするなど、風を共に感じることを試みた事例が紹介された。

一方、3歳児クラスで入園したBさんは、1型糖尿病のため、給食・間食前のインスリン投与や低血糖時の捕食が必要であった。いわゆる「動く医療的ケア児」であり、看護師・保健師はインスリン注射や低血糖時などの関わりが中心でクラスには入らないため、担任と連携を密にとりながら捕食の必要性を検討した。

1型糖尿病の疾患は、血糖管理が難しいため、血糖の下がるタイミングがわからない・捕食しても血糖値が上がらないなど、わからないことも最初は続いたため、血糖値変化を予測できるように努めた。また、Bさんはみんなと一緒に「いただきます」をしたいが、保健師・看護師はインスリンを打ったのでできる限り早く食事を始めたい思いがあった。3歳児クラスでは、血糖管理のため、グループごとでいただきますをしてもらうよう担任と相談したり、血糖値が下がる前に捕食をして持続的に活動参加ができるようにしたりした。また、いずれは自身自身でインスリン注射や捕食管理をする必要があるため、小学校入学時には自己注射ができるようなイメージが持てるよう働きかけた経過が紹介された。

保育園は生活の場であるため、保健師・看護師・保育士などの専門を生かした多職種連携が重要である。医療的ケアはその子にとっては生活支援の一部である。他児と同じように、子

もとの関わりや活動を楽しみながら、連携していくことが必要であり、小さな連携の毎日の積み重ねが大切である。また、受入れ経験がある人が少ない現状がまだあるため、医療的ケアはその子をよく知ることから始めて、構えずに保育士と看護師・保健師の視点を合わせていくことが望ましいと考えている。

3. パネリストによる意見交換・質疑応答

その後、フロアからの質問を踏まえ、討議・意見交流をした。

- Q 教職員理解を深めていくためにはどうしたらよいか？
- A 英国では、医療的ケア児が生まれた時点で病院から保育施設まで情報がつながっており、特別なニーズがあることが生後時点でスタートしている。医療的ケア児がNICUから在宅ケアになることが多いため、その先の保育・教育など先を見据えながらやっていくことが大切だと考える（上島氏）。
- A 知らないことによる不安が大きい可能性もあるため、入園時点で疾患の特性や配慮事項を具体的に伝える、担任保育士以外にも関わってもらえるよう工夫するなど、ハブ役として情報発信することも大切である。特に、重症心身障害児への我々の関わり方を見せる・示すと理解が深まることもある（杉田氏）。
- A 情報共有の重要性和同時に、個人情報保護のバランスをとる必要性もあると言える（柏倉氏）。
- Q 人材不足の中、運営側は看護保健職への求職も難しく、入職後も保育と看護保健職の間の言語の違いもある。保育現場への医療職の求職・勤務継続に望ましい方策はあるか？
- A 医療職の立場からすると、保育園は病院とは全く異なる。考え方が保育士と違う時もあるため、コミュニケーション



冬の講演会

を密に図りながら、お互いの立場の違いを理解し、尊重することが大切である。また、一人職種になることもあるため、一人職種への支援があると継続的に勤務しやすいのではないかと（杉田氏）。

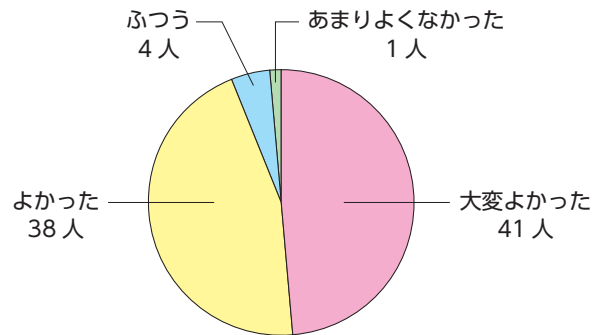
- A** 孤立させない支援は多くの自治体で取り組んでいる。わかってもらえる人がいない状況が続かないよう、医療外の現場で働く人たちの横のつながりを作ったり、スーパーバイザーの存在がつかないたりすることもある（上島氏）。

以上の質疑応答を踏まえた上で、柏倉氏から2名の話提供に共通するテーマとして、協働を踏まえた専門性の相互理解（上島氏）や、多職種連携におけるそれぞれの専門性を生かす重要性（杉田氏）が挙げられることが、総括として示された。最後に、上島氏・杉田氏からは、専門職が身構えていても子どもたちのほうがフラットな意識で壁を壊してくれること、大人がどのようにつなごうか悩んでいても意外に子どもは自然に接していて子どもたちが垣根を越えてくることなどが語られた。本講演会のテーマでもある「共生社会」とは、大人が子どもたちと共に育つ意識を持ちながら、共に相互理解・連携が深めていく大切さと期待を改めて実感できるシンポジウムであった。

4. 参加者アンケートから

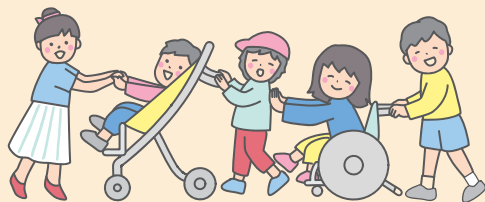
終了後のアンケートから、以下のような感想をいただいた。様々なご意見を踏まえ、次年度の企画も検討を深めていきたい。

2025年講演会感想 (N=84)



講演会感想から

- 障害のある人とそうでない人を差別なく共生できる社会について考える機会になった。また、障害児本人や本人の周りの人々に関する現時点での課題やインクルーシブ教育、保育についての課題を知ることができた。障害児、健常児が共に学べる環境のために一人一人に合わせた支援と専門機関の連携が重要であると考えた。
- インクルーシブ保育・教育の現状と課題、医療的ケア児の教育・保育における連携の重要性について事例を通して、具体的に学ぶことができました。それぞれの専門性を活かし、連携し合って子どもが他児とも関わり合えるように、また日常の保育や行事に主体的に参加できるように、保育者として働きかけていきたいと思いました。
- SENという言葉は知らなかったもので、知る機会になりよかったです。また、医療的ケアの必要な子どもを預かってくれる場所が少ないという話を聞いて、そういった場所を増やしていくにはどのようなことが必要なのか気になりました。今、愛知県ではこどもホスピスの設立に向けてプロジェクトが行われている、ということを知ることがあるので、実現するとういいなと思います。



シンポジウム感想から

- 医療的ケア児にまだ出会ったことはないが、他園には在籍しているため、今後もう少しずつ知識を深めていきたい。実例を聞き、医療的ケア児に対する“その子について知る”ことは、年度始めには健常児にも当てはまることのため、忘れずに続けていきたい。
- 医療的ケア児についての講演を聞き、命を守るための支援は特別なものではなく、日常の中に自然に組み込まれることが大切だと感じました。周囲の正しい理解と連携があることで、本人も安心して生活できると学びました。今後は不安や負担に寄り添い、チームで支える姿勢を大切にしたいです。
- 医療的ケア児が増加する中、ケアをする側はトイレに行くのも怖いという事実を知り、目が離せない状況にある人も多いのだと知った。医療的ケア児を受け入れる先が少ないことは大きな問題だと認識した。
- 医療的ケア児本人の支援も重要だが、その子の家族の支援という部分も忘れてはいけないのだと改めて感じました。また、医療的ケアには様々なケアがあり、子ども一人一人に合わせた関わり方・支援の大切さも改めて感じました。特に、保育所において医療的ケア児を受け入れるにあたっての工夫面は以前から気になっていた部分だったので、知ることができてよかったです。
- もう少し意見交流の時間があると嬉しかったです。また、講演中の一部の学生の私語で、講師の先生の声聞き取りにくかったです。
- 自分も医療的ケア児を保育園に受け入れる前は不安や怖さを感じていました。しかし、杉田保健師のお話のように、他の園児の保育と同じようにその子を知るという小さなことから始め、全ての子の環境として過ごせる手立てを工夫してきました。今後も看護師と保育士のコミュニケーションを深め、担当以外の保育士も関わりながら、医療的ケア児の保育は特別なことという垣根を崩しチーム保育で取り組み続けるよう心がけたいと思わせていただきました。ありがとうございました。
- それぞれの専門分野に携わる方々が、保育園という子どもたちの幸せを願い育む場で、手を取り合い尊重し合い連携していくこと、そのような大人達の姿を見て感じることで、ケア児や子ども達の大きな安心や心の育みにも自然と繋がるのではと感じました。垣根を越えた連携の重要性を多くの保育関係者に知っていただき、子どもの最善の利益のために従事していただきたいと願ってやみません。素晴らしいお話をありがとうございました。



子育て支援室「さくらんぼ」利用者へのアンケート



子育て支援室さくらんぼが閉室を迎えます。利用者の方を対象に2026年1月～2月にアンケートを実施しました。34名の方が回答し、さくらんぼの思い出などを枠に収まりきらないくらい書いてくださいました（紙面の都合上、内容を変えないように文言を一部変更しております）。

Q どのようなきっかけで支援室に来られましたか？（複数選択可）

項目	選択数	選択率
友達に聞いて（誘われて）	20人	58.8%
以前利用していた	6人	17.6%
HPを見て	5人	14.7%
さくらんぼ通信を見て	3人	8.8%
附属幼稚園でチラシをもらって	2人	5.9%
豊明市広報を見て	1人	2.9%
その他	6人	17.6%

圧倒的に「友達に聞いて（誘われて）」と回答して下さった方が多かったです（34人中20人が選択）。ひとりで突然飛び込むのは勇気がいりますよね。「その他」の中でも5人が「卒業生なので支援室のことを知っていた」と書いており、大学に併設されていることが利用のきっかけにもなっていたことが分かります。

Q 支援室を利用してよかったところは？（複数選択可）

項目	選択数	選択率
普段と違うあそびができた	29人	85.3%
同じくらいの子どもとあそべた	20人	58.8%
息抜きができた	20人	58.8%
子育ての悩みの相談ができた	15人	44.1%
親子のできるあそびを知ることができた	11人	32.4%
お気に入りのおもちゃや絵本があった	9人	26.5%
ママ友ができた	7人	20.6%
（その他）交流が楽しい	1人	2.9%

子どもにとっても大人にとっても、新しい友達ができたり、新しい刺激を受けたりする場であったことを嬉しく思います。子育ての息抜きや悩みの解消のお役に立てていたなら嬉しいです。



Q 支援室の思い出をひとつ教えてください。

たくさんの思い出を書いていただきました。いくつか抜粋してご紹介します。

- 支援室に行くといつもニコニコしていた
- 「また行きたい」と子どもが言ってくれた
- 親にべったりだった子がひとりで遊ぶようになった
- 他の支援室では先生が子どもと遊んでくれないが、さくらんぼはスタッフが遊んでくれた
- 下の子を見てくれて、上の子と遊ぶ時間が作れた
- 学生と一緒に手遊びしたことを、ずっと覚えている
- エプロンを付けておままごとをしていたら、家でも付けてお手伝いをしてくれるようになった
- すべり台が苦手だったのに、さくらんぼのすべり台で怖くなくなり、公園でもすべることができるようになった
- 同じ年の子を持つお母さんを紹介してもらい、いまでは大切な存在になった



Q 学生との交流会はいかがでしたか？ ご意見・ご感想を教えてください。

- 自分にとってお姉さんと交流できるのは刺激的で、子どもにとっても良い経験だった
- 人見知りと一緒に遊ぶことは難しかったが、優しく声をかけてくれてうれしかった
- 普段かまってあげられない上の子と遊んでくれて、子どもも嬉しそうでも助かった
- 子どもがお姉さんたち相手に自分を出せていて、幼稚園に通わせても大丈夫だと思えた
- 子どもの成長にもとても役立つ時間だと感じた。ぜひ続けてほしい

最近利用し始めたという保護者の方も回答して下さっていて、「残念ながら経験できなかった」「お姉さんたちと交流したかった」という声もたくさんありました。



「さくらんぼ」は今年度で閉室を迎えます。「ひとこと」をお願いします。

- 寂しいです／悲しいです／閉室しないで（多数）
- 子育てが大変な時期に先生や他のお母さんとおはなしができて息抜きになった
- 母子ともにとっても落ち着く場で、生活の一部だった
- 心のよりどころがなくなり、悲しい
- 先生たちもとても話やすく、いろいろな悩みにもものっていただき、とても救われました

「ひとこと」では終わらせられないぐらい…」と、用意した枠2つくらいに小さな文字でたくさん書いてくださった方もいらっしゃいました。



温かいお言葉の数々に、支援室がみなさんに大切にさせていただいてきた場であったことを改めて実感いたしました。子どもたちの成長の場として、保護者の方のリフレッシュや子育ての相談の場として、また保護者同士／子ども同士の交流の場として、さくらんぼが貢献できていたなら幸いです。2人の子どもがお世話になった利用者の立場からも、さくらんぼがなくなることは大変残念です。支援室に来ていただいていたお子様とその保護者様のこれからの歩みの中に、さくらんぼでの時間が温かな思い出として残っていれば幸いです。

（文責 上原隆司）



2025年度 子育て交流会、支援室開放日参加者数

2026/3/6現在

	交流会／回	子ども	大人	開放日／回	子ども	大人
4月	7	50	38	8	59	48
5月	9	54	46	11	98	77
6月	8	56	46	12	77	64
7月	4	36	30	5	55	41
9月	8	46	39	12	92	77
10月	9	45	37	12	114	89
11月	7	43	34	9	85	70
12月	6	39	30	9	66	55
1月	7	54	43	9	74	62
2月	6	38	32	11	105	90
3月	2	24	21	3	37	29
計	73	485	396	101	862	702





大学における子育て支援室の役割

小柳雅子（名古屋短期大学保育科） 武藤直子（桜花学園大学保育学科）
キーワード：子育て支援、地域交流、保育者養成

子育て支援室「さくらんぼ」の特徴と役割

本学キャンパス内にある子育て支援室「さくらんぼ」は、開設当初から閉室となった2026年3月までの期間、本当に多くの親子さんにご利用いただきました。さくらんぼの特徴は大きく3つあります。1つ目は「いつでも・どなたでも」ご予約いただける事、2つ目は開設時間に保育士が常駐している事、そして最後に、ここが学生たちにとって貴重な学びの場となっている事です。

まず「いつでも・どなたでも」について。さくらんぼは、すべての未就園児を対象とした開放日と対象年齢ごとの交流会開催日で開室スケジュールを組んでおり、参加が可能な日があれば「いつでも・どなたでも」ご予約頂けるシステムで運営して参りました。これは昨今の子育ての状況や関連課題に鑑みての方針です。ふとした時にどなたでも気軽に気兼ねなく立ち寄ることのできる子育て支援室が生活圏内の中に1つでも多く存在することは、とても大きな意味があります。

次に、開設時間に保育士が常駐している点です。保育士が常駐していることで、安心してさくらんぼを利用していただけますし、子育てに関連した悩み事や疑問を「話す」だけでなく「相談する」ことまでが可能となっています。

そして最後に、さくらんぼは学生たちにとっての貴重な学びの場です。さくらんぼは本学7号館校舎内にあり、学生たちは授業の間の休み時間や登下校の最中に、さくらんぼを利用する親子さんの姿を間近に見ることができます。また学生たちが利用者の親子さんと共に活動を行う「交流会」では、身体遊びや手遊び、絵本の読み聞かせや弾き歌い、製作などが行われますが、これらの活動を計画・実施するのは学生自身です。学生たちの中には本格的な実習が未経験で、交流会の際に様々な親子さんの姿を目にしたたり、実際に交流を持たせて頂いたりすることを通して、沢山の発見をしていくケースが非常に多く、保育者を目指す学生たちにとって他に代えがたい学びの場となっています。

学生による交流会の親子の姿から

今年度も、多くの親子さんが交流会に参加してくださいました。初めてご参加くださった方も、数年来さくらんぼをご利用くださっている方もいらっしゃいます。交流会には各回「対象年齢」が定められているため、参加する回の変化によって、子どもさんの成長をふとした時に実感なさっている保護者さんもいらっしゃるようです。

先述したように、この交流会では本学の学生たちが計画した

活動を実施します。ゼミ単位の参加が基本ですが、準備してきた活動が上手くいくかどうかとドキドキしながらやってくる学生達に、保護者の方は温かいまなざしを、子どもたちは興味津々のまなざしを送ってくれます。

もちろん子どもたちが、ずっと興味を持って楽しく活動に参加してくれるとは限りません。時に学生たちが「どうしよう」と対応に迷ってしまう状況になることも。そのような時にさりげなく子どもたちを抱き寄せ、言葉をかけ……ご自宅での様子を彷彿とさせる親子さんの自然なやりとりは、学生たちの緊張をほぐして心をほっと寛がせてくれます。

保育者のたまごである学生たちの活動は、養成段階にあるからこそ手探り・手作り感に魅力がある一方、保育の専門性と言う観点からはまだまだ成長途上にあるため、保護者の方の中には（もちろん、上記のように保育士がその場に常駐しているとはいえ）少しハラハラドキドキする気持ちでこの交流会に参加された方もいらっしゃるのではないかと思います。ただ、この交流会はさくらんぼが閉じることとなった今年度の最後の瞬間まで着実に息づき、学生たちの学びの場であり続けていました。この点、さくらんぼをご利用くださっていた保護者の皆様には、心より御礼申し上げる次第です。

交流会の準備

さてこの交流会、学生たちは桜花学園大学と名古屋短期大学の「ゼミ」単位で参加をしています。各ゼミではまず活動の計画を立て、それを支援室から指示された形で書類におこすと、ゼミの代表者がそれを以て支援室の保育士と事前の打ち合わせを行います。そしてそこから細かな準備作業が始まります。

計画時にはゼミ教員から「交流会全体がどのようなスケジュールで実施されるか」「その中で学生たちはどれくらいの時間どのような場所で活動をするか」について基本的な説明をします。加えてその日に参加する子どもさんの年齢についても伝え、そこから年齢に合わせた活動について、担当者なども決めながら具体的な形にしていきます。

活動が決まったら書類をおこし、必要な準備を進めていきます。大型絵本を図書館から借りて歌を合わせながら読む練習をしたり、身体遊びに使う車のハンドルの新聞紙で作ってみたい。事前練習や準備はもちろん、当日は交流会が始まる1時間くらい前に集合して最後の打ち合わせと練習をします。

交流会を通して学生に期待すること

「先生、子どもって本当に可愛い……！」「私を見てニコって笑ってくれたんですよ、ニコって」「自分達で計画した活動に

沢山反応してくれて、一緒に踊ったりもしてくれてすごく嬉しい!」[バイバイの時間が本当にさみしかった。また会いたいな]など、交流会を終えたばかりの学生たちは、いつも素直な喜びを言葉と笑顔で表してくれます。そしてその興奮冷めやらぬまま、振り返りの時間を持ちます。皆で活動の感想を語り合い、参加して得た事などを専用のシートで項目ごとに振り返っていきます。

その際、いつも感じるのが空気の変化です。最前まで喜びと興奮に包まれていた場合は、振り返りの時間に入ると一気に学習モードに切り替わります。子どもたちの可愛らしさ、親子さんの姿に見る絆などを素朴な言葉で語り合うと共に、自分たちの活動で親子さんに楽しんでもらえたか、計画した内容は子どもたちの発達の状況にマッチしていたかなど、様々な授業で学修してきた知識を総動員して自分たちの活動を振り返っていきます。我々が何を言わずとも色々な方向に振り返りの話題は展開し、各々何某かの結論を得て、また次の学びにつなげていきます。交流会は学生たちにとって新鮮な感動と学びを得る場であると共に、自分自身が目標とする保育者像をまた一つ、具体的なものとしていく場でもあるのです。

学生の感想から

ここで少し、交流会に参加した学生たちの感想や学びの内容をご紹介します。

活動について

- ＊子どもたちの前に立って自分たち主催の活動を行うことが初めてだったので少し緊張しました。
- ＊読み聞かせを行ったのですが、子どもたちが真剣に聞いてくれる様子がとても嬉しかったです。笑顔がとても可愛かった。
- ＊今日のために計画して準備してきたことで、親子の方々に楽しんで頂けて良かった。
- ＊計画した活動自体は準備した通りにできたけれど、子どもたちの様子を見ると、楽しんでもらえるために、まだまだ色々

工夫できたことがあったなと思いました。

- ＊ドキドキしながらからだ遊びをしました。緊張して少し声が震えてしまった。自分たちの活動の後に支援室の保育士さんがパネルシアターを演じてくださったのですが、声や動きの表現力が凄くて自分もあんな風に出来るようになりたいと思った。

自由遊びの時間について

- ＊企画が終わった後も、自由遊びをする子どもたちと関わる事ができたので、子どもの様々な姿を見ることができました。
- ＊はじめましての子どもたちとどう接してよいか分からず、最初は戸惑ってしまったけれど、保護者の方や保育士の方の真似をしながら、徐々に一緒に遊べるようになりました。
- ＊自由遊びの時間に、少しだけ子どもと1対1で関わる事ができました。子どもの言葉に耳を傾けながら声をかけると、色々な反応を返してくれました。
- ＊親子の関わりを間近で見ることができた。恥ずかしそうに保護者の方の陰に隠れたり、何か見つけた時に真っ先に保護者の方に駆け寄っていったりする姿が印象的でした。

感想からは学生たちがそれぞれの視点で多くの学びを得ていたことが分かります。そして、交流会に参加した学生たちに共通していたのが、親子さんとの関わりを持つことを通して「幸せ」だと感じていたことです。保育者を目指す学生たちにとって、子どもたちと触れ合うことのできる交流会の時間は、この上ない喜びなのだと思っていました。

子育て支援室における交流会の意義

大学のキャンパス内にある誰でも気軽に利用できる子育て支援室「さくらんぼ」——皆様ご存知のように、2026年3月を以て、このさくらんぼはその長い歴史に幕を下ろします。コロナ禍などで開室自体も難しい時期がありましたが、さくらんぼは、我々にとってはもちろん、保育者を目指す全ての学生たち

表1 2025年度 さくらんぼ支援室交流会等実施状況

日時	ゼミ名	参加人数	内 容	日時	ゼミ名	参加人数	内 容
5月21日	小川ゼミ	12	手遊び・ボール遊び	5月22日	嶋守ゼミ	11	ふれあい遊び
6月11日	小柳ゼミ	13	大型絵本・手遊び・歌	5月29日	嶋守ゼミ	11	ふれあい遊び
6月25日	近藤ゼミ	12	親子遊び・海の探索・カーテンくぐり	6月26日	平松ゼミ	8	手遊び・ふれあい遊び
7月 2日	八幡ゼミ	13	水遊び・室内遊び・歌	10月29日	上村ゼミ	7	手遊び・パラバルーン・ふれあい遊び
11月12日	杉山ゼミ	12	手遊び・トンネルくぐり・体操	11月20日	松永ゼミ	13	親子遊び・ふれあい遊び
12月 3日	上原ゼミ	14	手遊び・ダンス	11月27日	平松ゼミ	12	マジックシアター・まねっこゲーム・絵本
12月10日	鷹田ゼミ	13	大型絵本・手遊び・リズム体操	12月 4日	堀ゼミ	7	手遊び・ふれあい遊び
1月23日	小川ゼミ	5	手遊び・身体遊び・マラカス遊び	12月11日	堀ゼミ	7	ペープサート・手遊び・ふれあい遊び
				1月15日	上村ゼミ	15	手遊び・親子ダンス

にとって大切な学びの場でした。それと同時に、学生たちが素朴に「保育が好き」「子どもが好き」と感じることができる唯一無二の場所であったと思います。これまで、さくらんぼの活動にご参加いただきました沢山の皆様、本当にありがとうございました。

本学のキャンパス内ではくまりんやSLOWパーク、また2025年度から始まった桜花デイなど、様々な取組みが実施されており、その意味では引き続きキャンパスの子育て支援はこの地域の皆様と共に歩み続けることとなります。我々エデュケア研究所も、さくらんぼとはまた別の形・方法で、引き続き地域と歩み続けることのできる子育て支援について、前向きに考えていきたいと思っています。

豊明市子育て支援センターたけのこ交流会への学生参加

豊明市と桜花学園大学・名古屋短期大学は包括協定を結んでおり、地域連携センターに属するチャイルドエデュケア研究所では豊明市子育て支援センターたけのこの交流を事業の一つとして実施しています。2025年度は、交流会に2回19名の学生が参加しました。前述の子育て支援室「さくらんぼ」は大学内の施設ですが、豊明市子育て支援センターたけのこは豊明市が実施する子育て支援事業であるため、学生は地方自治体が行う子育て支援について体験的に学ぶことができます。

表2

日時	ゼミ名	参加人数	内容
5月21日	武藤ゼミ	7	わらべうた遊び、ふれあい遊び、ミュージックシアター、遊戯、体操
5月28日	武藤ゼミ	12	手遊び、ふれあい遊び、エプロンシアター、ハイハイよちよちレース、体操

交流会を通して学生に期待すること

豊明市子育て支援センターたけのこよりご提案いただいた内容（ふれあい遊び、簡単な遊戯や体操、手遊びなど親子が一緒

に遊べるもの／ペープサートなど親子が一緒に見て楽しめるもの／授業で学んだことの紹介など保護者が知識や情報を得られるもの）をもとに、交流会当日に向けて、ゼミで準備を進めました。学生は10組の1歳児親子のみなさんに楽しんで参加してほしいとの願いを持って内容を考えます。立案する際には、何のために、誰のために行うのかという問いを立てながら進めていきました。準備と実践を通して、実践の技術の獲得だけでなく、地域子育て支援についての実情の理解や在り方を考えていってくれることを期待するものです。

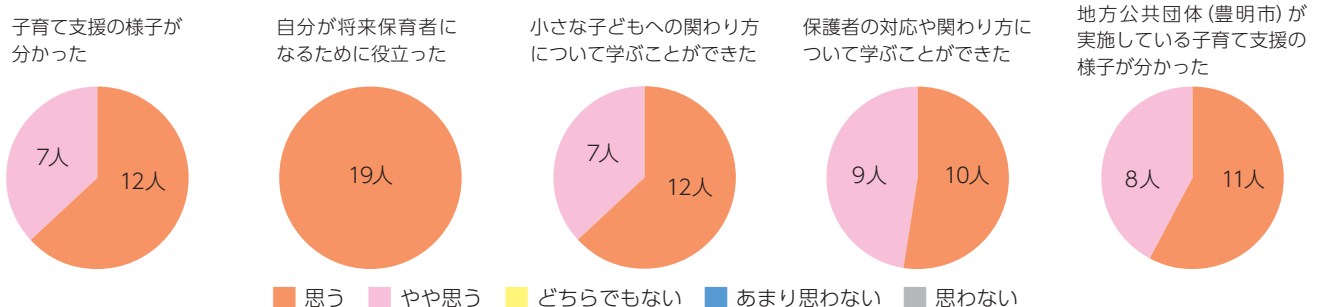
学生の感想から

- ＊親子間の関わりを観察する中で、学校の授業での学びをより深めることができました。
- ＊乳児やその保護者と交流したことがなかったので、今回の経験で新たに気づいたことがいくつかありました。
- ＊子どもや保護者が一緒に楽しんでくれたり、笑顔で見てくださったりしていたので、緊張したが自分自身も楽しく参加できました。
- ＊保護者と子育て支援センター職員の関わっている姿を間近で見ることができて、勉強になりました。
- ＊保護者と子どもの接し方を見て、様々な経験をしてほしいという保護者の気持ちが伝わってきました。

たけのこにおける交流会の意義

学生の感想やアンケート結果（図1）から、交流会への参加を通して、乳幼児の理解や保護者への対応や関わり方に加えて、地域子育て支援の意義や実態についての学ぶことができた実感していることがうかがえます。また、センターの職員の方からアドバイスをいただき、保育実践を学ぶ機会にもなりました。学生にとって、地域の自治体が行う子育て支援に参加する意義は大きいと考えます。

図1 たけのこ交流会参加学生のアンケート結果



2026年度事業計画

チャイルドエデュケア研究所の2026年度のテーマは「生涯にわたるウェルビーイングの向上を目指して」です。本学キャンパス内にクリニックができること、また保育に関連したウェルビーイングが、その後の人生にとって非常に大きな意味を持つことから、このテーマといたしました。さくらんぼの閉室に伴い、新たな取組みを模索しつつ、引き続き、東海三県の保育者の皆様を中心に子育て家庭、学生、卒業生と共に保育の未来を考えていきたいと思っております。

夏季保育 セミナー

- テーマ：「絵本作家なるかわしんご氏による
講演とワークショップ」
- 日時：2026年6月7日(日) 13:30~15:30
- 場所：桜花学園大学・名古屋短期大学



冬の講演会

- 講演：上田敏丈氏(名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)
- 演題：「生涯にわたるウェルビーイングの向上を目指す教育・保育」
- 分科会：子どもとウェルビーイング(上村 晶)
保護者とウェルビーイング(ダーリンプル親子)
ICT&AIとウェルビーイング(上原隆司)
保育者とウェルビーイング(小柳雅子)
- 日時：2026年12月20日(日) 13:30~15:30
- 場所：桜花学園大学・名古屋短期大学8号館 さくら講堂

編 集 後 記

「チャイルドエデュケア研究所年報」第23号をここにお届けします。2025年度は研究所にとって大きな決断の年となりました。長年沢山の方に愛していただいた子育て支援室「さくらんぼ」が2026年3月を以て閉室することとなりました。キャンパス内における子育て支援システムは形を変えてこれからも継続していきますが、エデュケア研究所として何ができるのかについて模索して参りたいと思っております。

そして今年度は前年度に引き続き「共生社会を担う子どもの育ちのために」をテーマとして夏季保育セミナー、冬の講演会を開催しました。どちらも大変多くの方々にご参加いただき、あらためて、今の時代の保育と子育て、そして子どもたちに対する当研究所の使命を考えさせられた思いです。

上記のように、2025年度は研究所がこれまでにない岐路に立った年となりました。2026年度は、支援室と研究所がこれまで積み重ねてきた多くの知見・経験を丁寧に整理しながら、地域の保育・教育・子育てに対する活動について研究所も含めた本キャンパス一丸となって取組んでまいりたいと思っております。

【2025年度 研究所役員体制】

- | | | | | | |
|------|------|--------|------------------|-------|-------|
| ●所長 | 武藤直子 | ●主任研究員 | 上村 晶 | ●事務局員 | 佐藤多美江 |
| ●副所長 | 小柳雅子 | | ダーリンプル親子
上原隆司 | | 濱田雄次 |

表 紙 デ ザ イ ン

田端智美



チャイルドエデュケア
研究所

年報

23号

2025

発行

桜花学園大学・名古屋短期大学

〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待48

名古屋短期大学 TEL.0562-97-1306 FAX.0562-98-1162

桜花学園大学 TEL.0562-97-5503 FAX.0562-98-1162

2026年3月31日発行